

## 吉備池廃寺発掘調査現地説明会資料

桜井市教育委員会

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

### はじめに

吉備池廃寺は、これまで3次にわたる調査により、東に金堂、西に塔を配した「百済大寺」の可能性が極めて高いと考えています。金堂は東西約37m、南北約28mの掘込地業の上に高さ2m以上の基壇を築いたもの、塔は旧地表面上に1辺約30m、高さ2mを超える方形の基壇を築いたもので、我が国では大官大寺と百済大寺の二ヶ寺にしか例のない九重塔の可能性が考えられます。また、塔基壇の南方約30mの位置に幅約6mの南面回廊を確認し、さらに塔基壇の西方約26mに南面回廊と同規模の西面回廊が見つかり、回廊の東西規模は160mを超えると推定しています。

出土した軒瓦は西暦643年に金堂から創建され始めた山田寺所用瓦の祖型にあたり、それよりわずかに先行する年代が与えられること、また、瓦の出土量が少なく補修用の瓦が認められないうえに、完形品が一例もないことから、短期間の内に他へ移建された蓋然性が高いとみています。

これらの点から、吉備池廃寺は、一豪族の氏寺などではなく、天皇家に関わり、国家的シンボルとしてその威容を誇っていた寺院とみるべきであること、史料の上でこれに相応しい寺院を求めると、『日本書紀』および『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』が舒明天皇11年(639)発願と伝え、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』では天武2年(673)に高市の地に移建され高市大寺となった、日本最初の勅願寺である百済大寺である蓋然性が極めて高いと考えています。

今回の吉備池廃寺範囲確認調査の目的は、東面回廊の位置を定め回廊の東西規模を確定すること、講堂・僧房など寺の北側に位置する施設の確認、および西北部への寺地の広がりを把握することにあります。調査は1月7日から開始し、現在継続中です。

### ここまでの主な調査成果

ここではそれぞれの調査区ごとに、飛鳥時代の遺構を中心に説明します。

**西区** 西区の主な遺構は中世以降の小穴数基・弧状の溝1条・L字形に巡る小溝3条、平安時代から中世にかけての流路3条などがあります。北トレンチでは、水田床土の直下が地山となり、中世以前の遺構で確実なものはないことから、東から延びる丘陵は中世以降に大きく削平されものと考えています。南トレンチでは、南東から北西へ流れる平安時代から中世にかけての流路の埋土から、忍冬紋軒平瓦を始めとする吉備池廃寺創建期の瓦片が多数出土しています。二次的な堆積ながら瓦の散布する範囲が西北部にも広がることが確かめられました。

**中央区** 飛鳥時代の掘立柱建物のほかに中世の大溝2条・掘立柱塀3条・小溝多数などがあります。



飛鳥時代の掘立柱東西棟建物1は、背後に迫る丘陵の南縁を削平して造成した平坦面に建てられています。建物の規模は、桁行3間以上、梁間2間、桁行・梁間ともに柱間が約3mあり、柱穴の掘形は一辺1.5～1.8mの隅丸方形です。飛鳥時代の掘立柱建物で柱間が3m前後の規模をもつものは、例えば飛鳥宮跡SB7701（いわゆるエビノコ大殿）、稲淵宮殿遺跡SB001などで、これらは宮殿の主要殿舎です。今回検出した建物1は大規模な吉備池廃寺に相応しい建物といえます。

建物1は伽藍の中央北部に位置し、桜井市教育委員会が1999年に調査した大型掘立柱建物（SH-1001）とは、北側柱筋を揃えており、両者は密接に関連しています。SH1001は、出土土器からみて7世紀中頃から後半にかけて使用されていたとされ、建物1もその頃のものと考えられます。

建物1は、現状では間仕切りあるいは廂が認められませんが、金堂や塔などの伽藍との位置関係やSH1001との関連性からみて、僧房と考えるよいでしょう。西妻は未確認ですが、SH1001と同等あるいはそれ以上の規模を備えると予想されます。SH1001を僧房の施設とみることについては、桜井市教育委員会により既に指摘されていますが、建物1の発見はその考えをさらに補強します。ちなみに、建物1北側柱と南面回廊南雨落ち溝との間の距離は約160m以上あります。

今回は池の中についても調査を実施しました。北面回廊あるいは講堂の発見には至りませんでした。弥生・古墳時代から飛鳥時代にかけての流路とそれを埋め立てたと思われる飛鳥時代中頃の粘土層を確認しました。粘土層からは7世紀中頃の土器が出土しており、吉備池廃寺創建に伴う整地の様相を初めて知ることができました。このような整地層は東区においても確認しています。

なお、中央区からは平安時代の軒平瓦1点、軒丸瓦2点、丸・平瓦が出土しており、吉備池廃寺廃絶後、平安時代になってからも付近に小規模な御堂のような瓦葺き建物が存在していたことが窺えます。

**東区** 南トレンチでは、飛鳥時代の遺構として、東面回廊西（内側）雨落ち溝の石組み抜き取り溝1、金堂基壇掘込地業北東隅、掘込地業を巡る周溝、2条の柱列があります。

抜き取り溝1は幅1.3m、深さ20cmの南北溝で、わずかに2石が抜き取られないまま底部に残っていました。礫は20cm大で、1石は平らな面を上に向けています。石を抜き取った後の溝は、黄色ないし黄灰色の地山土混じり粘質土で一気に埋め立てられ、その際に投棄された瓦や土器が含まれていました。南面回廊北（内側）雨落ち溝の石組みを抜き取った素掘溝は、今回の抜き取り溝とほぼ同じ規模を有し、今回の抜き取り溝1に連なるものと考えられます。

東面回廊東（外側）雨落ち溝は、抜き取り溝1の東方約6mの位置にその所在が想定できますが、現在までのところ未確認です。既に削平されているのかもしれませんが、また、18m北に位置する北トレンチ内では、西および東雨落ち溝とも見つかっていません。地形的に北が高くなっていることから、溝は既に削平されている可能性が高いとみています。

回廊基壇土や回廊の建築に伴う足場穴などは、現在までのところ未検出で、今後さらに精査を継続することとしています。

金堂基壇の掘込地業は、1997年（第81-14次）の調査成果から予想された位置に東北

隅を検出しました。基壇掘込地業に平行して巡る周溝については、1997年の調査でも北辺と西辺で検出していますが、今回、前調査で見つかった北溝の東延長部分と東辺へ回り込む溝を確認しました。幅は、北辺の溝が1.3 m、東辺の溝が1.1 m、掘込地業の肩との間隔が北辺では1.5 m、東辺では3.2 mです。溝の底部には人頭大の礫があります。前回調査では、近世の攪乱により時期を明らかにできませんでしたが、今回の調査では、溝が寺院造営時の黄色の地山土を含む粘質土により埋められていることが明らかとなりました。この周溝は、北溝の底部が西に向かって低くなっていること、さらに周辺はもともと湿潤な土地であることなどから、造営時の排水を目的としたものと考えます。

柱列は周溝の外を巡るもの2条を検出しています。溝からの間隔は東辺が1.5 m、北辺が2.1 mであり、柱間は1.6～3.5 mと不揃いです。埋土には黄色の地山土を含む粘質土が含まれています。性格は不明ですが、あるいは金堂解体時の足場穴かもしれません。

吉備池廃寺廃絶後は、東面回廊の位置に平安時代から中世にかけての南北溝1（北・南トレンチ）と南北溝1から分岐し西流する東西溝1（北トレンチ）が流れるようになり、回廊基壇などは削平を受けました。幅1.8 m～2 m、深さ20 cm前後あり、埋土中には多数の礫と共に瓦・土器などの遺物が比較的多く含まれ、とくに吉備池廃寺創建瓦が顕著に認められます。出土土器からは、12世紀頃には埋まったと考えています。

最後に、前回検出された金堂周囲の砂利敷きについては、今調査区では残りが悪く広く敷き詰めた状況は検出できませんでしたが、拳大以下の礫の散布が僅かながら認められ、砂利敷きの名残を窺うことができます。

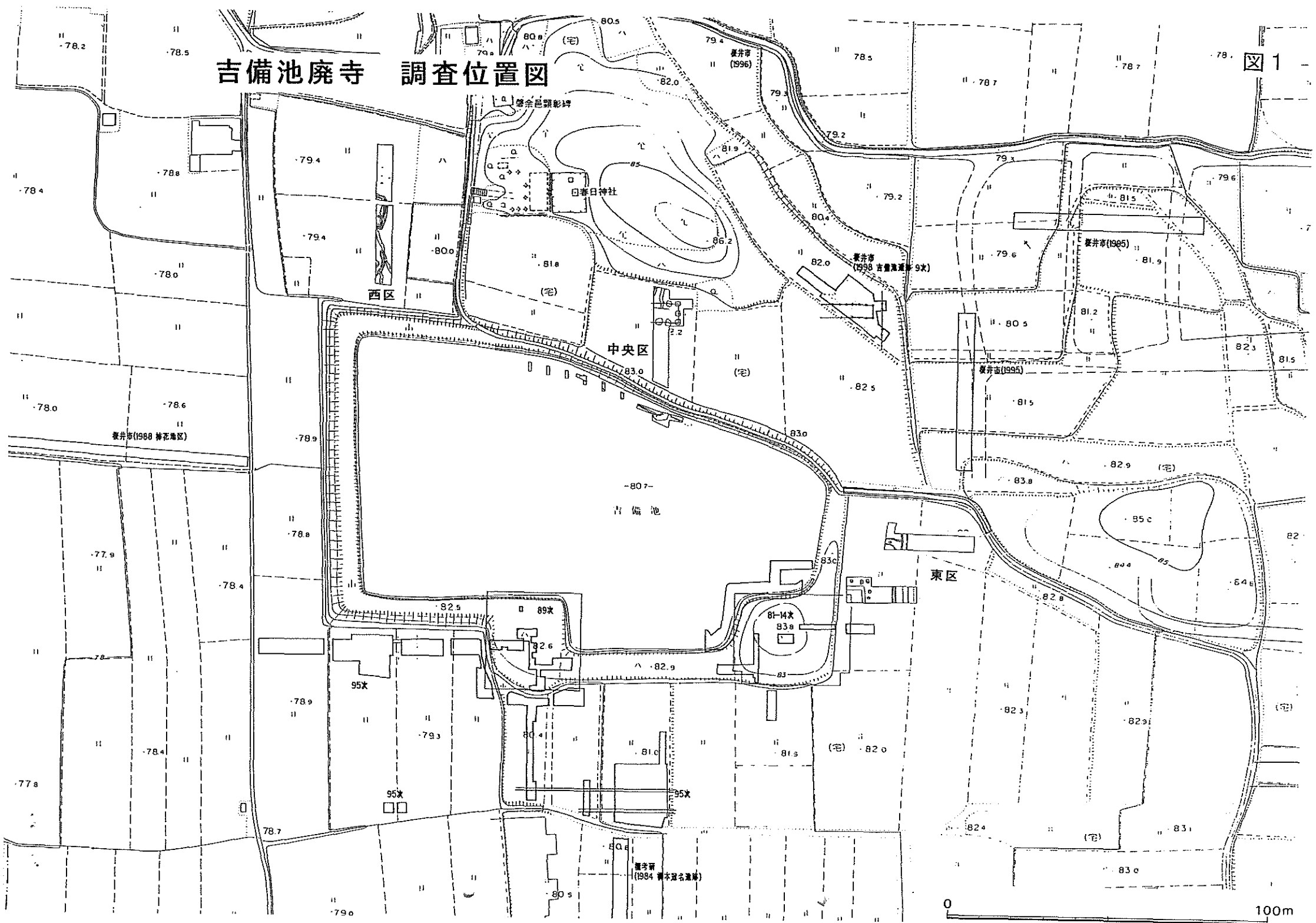
#### まとめ

今回の調査では、東面回廊西雨落ち溝および伽藍中央北部の僧房の存在が明らかになり、伽藍および寺地の規模について新たな情報が得られました。また、金堂基壇造営時の排水溝について新たな知見が得られました。さらに、寺院創建に伴う整地の状況が判明するなど、造営過程や完成度についても多くの情報を得ることができました。

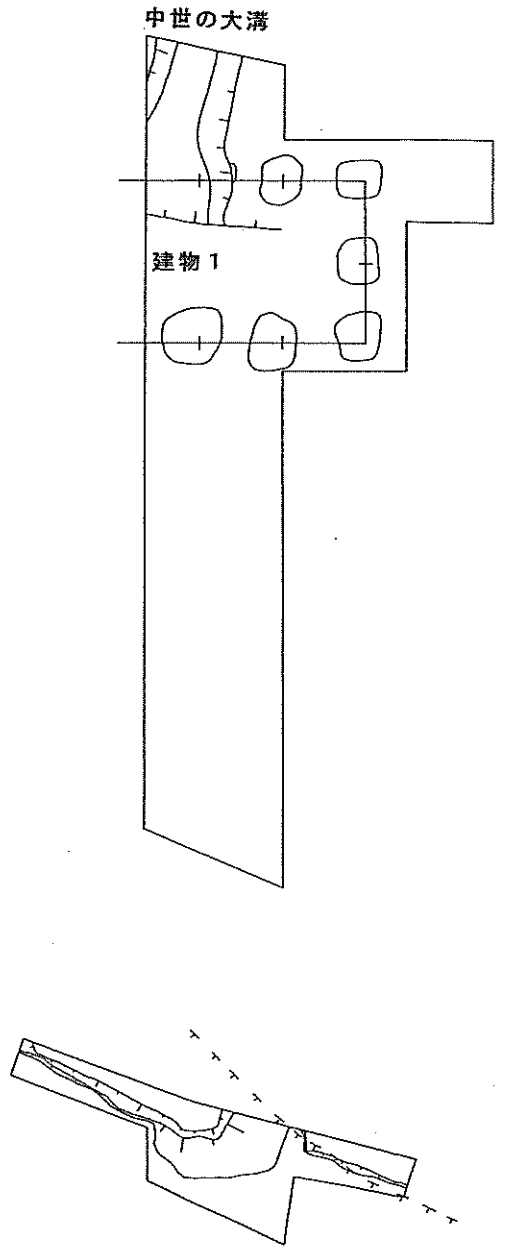
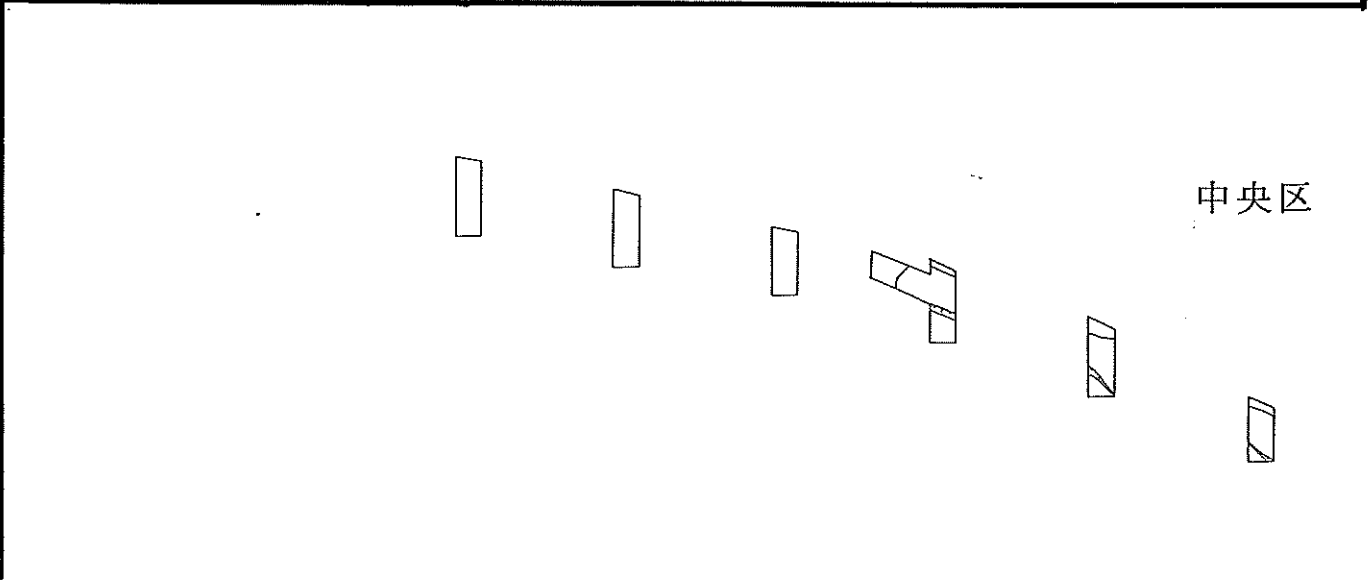
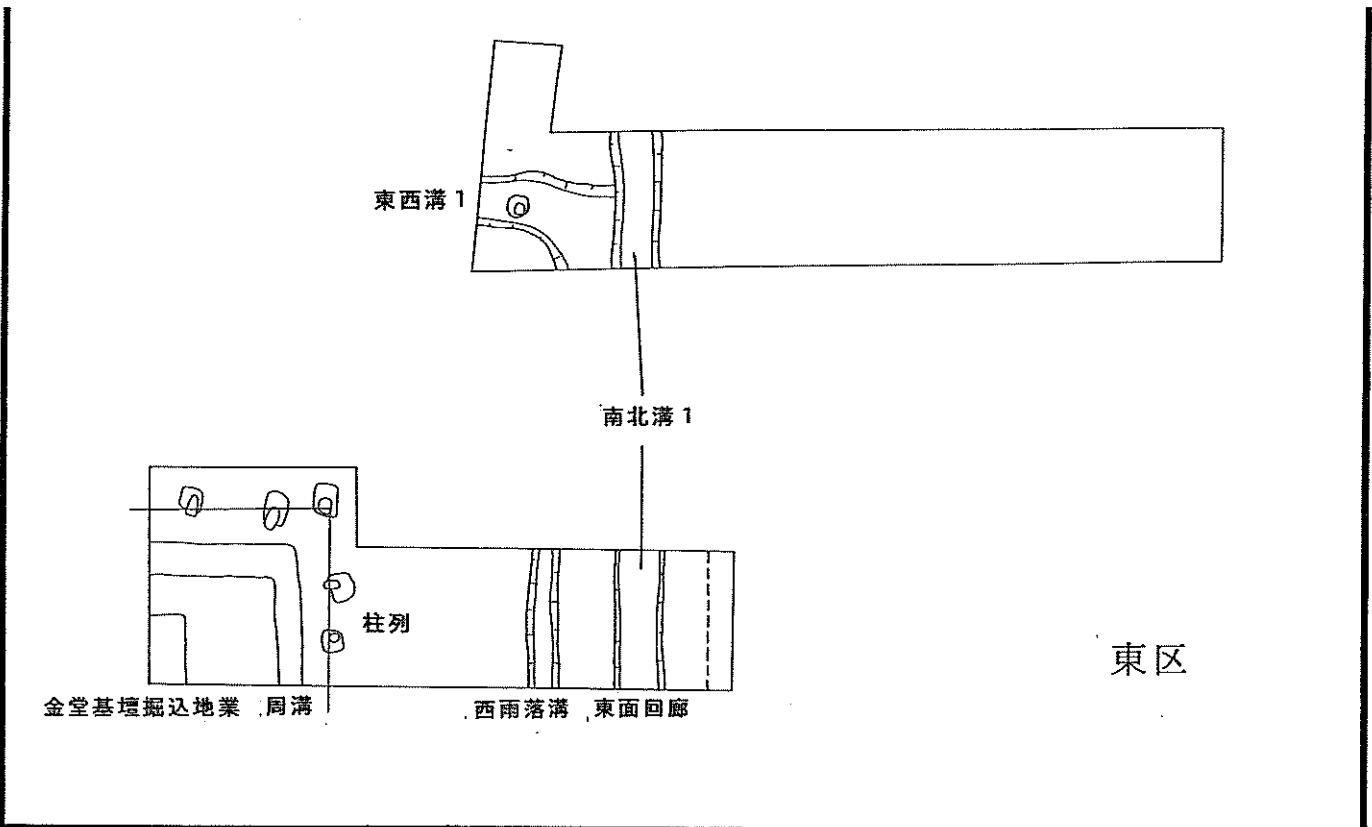
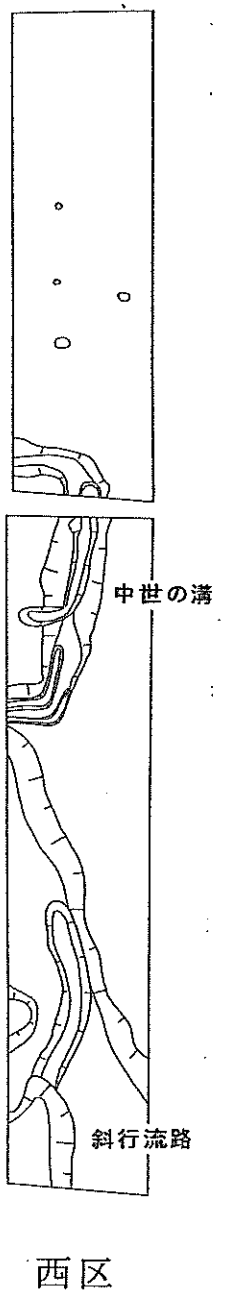
伽藍の規模については、東面回廊の検出から、回廊の東西幅が心々で約158 mと判明し、外側の雨落ち溝まで含めると約164 mとなります。寺地については、東西幅が180 mを超え、南北幅は160 m以上の規模をもっていることが分かりました。金堂基壇造営については、基壇の掘込地業の外周にも溝を巡らせて排水に完璧を期そうとしたもので、湿潤な土地柄に対応した丁寧な仕事ぶりの一端が明らかとなりました。

# 吉備池廃寺 調査位置図

図 1

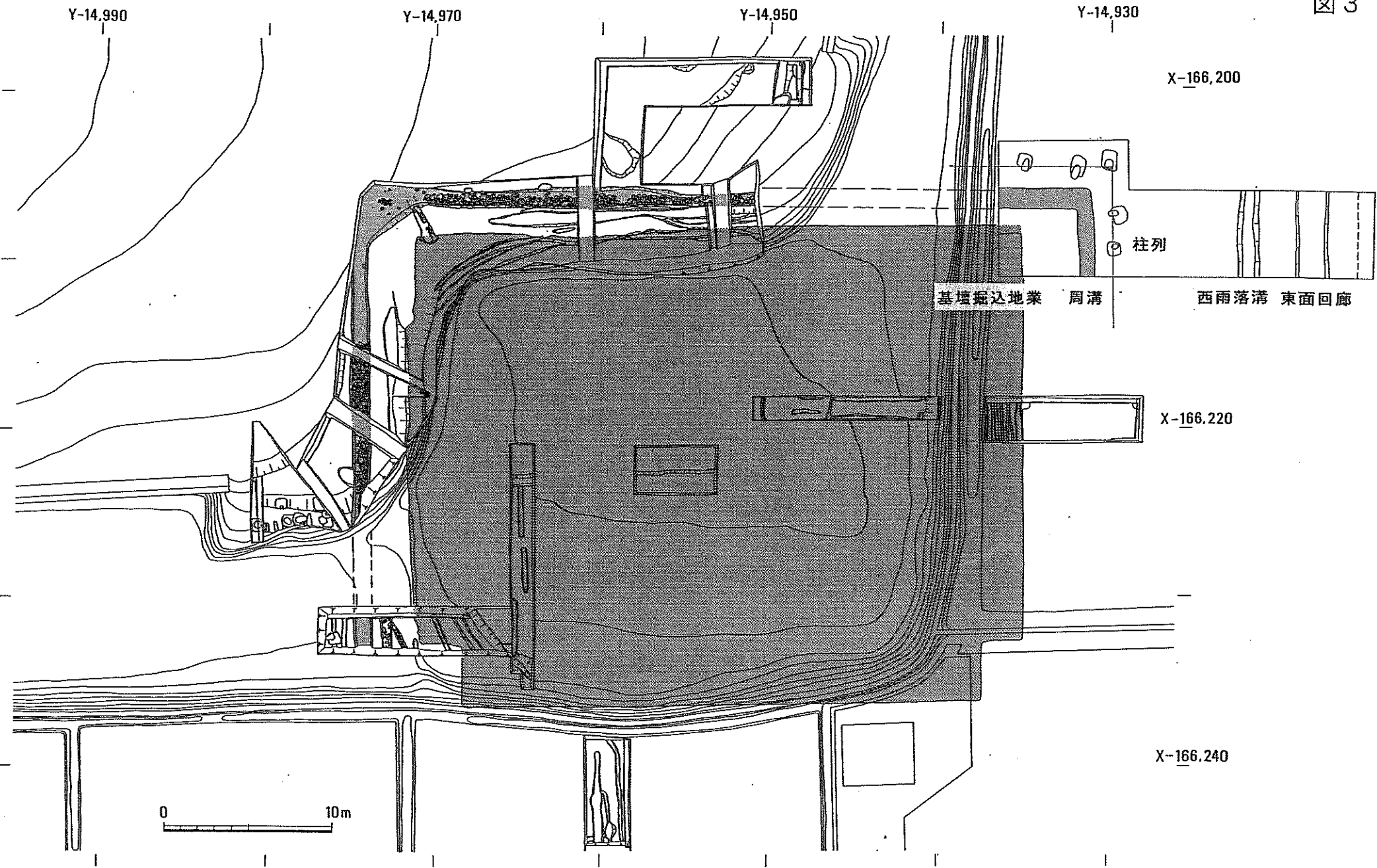


0 100m

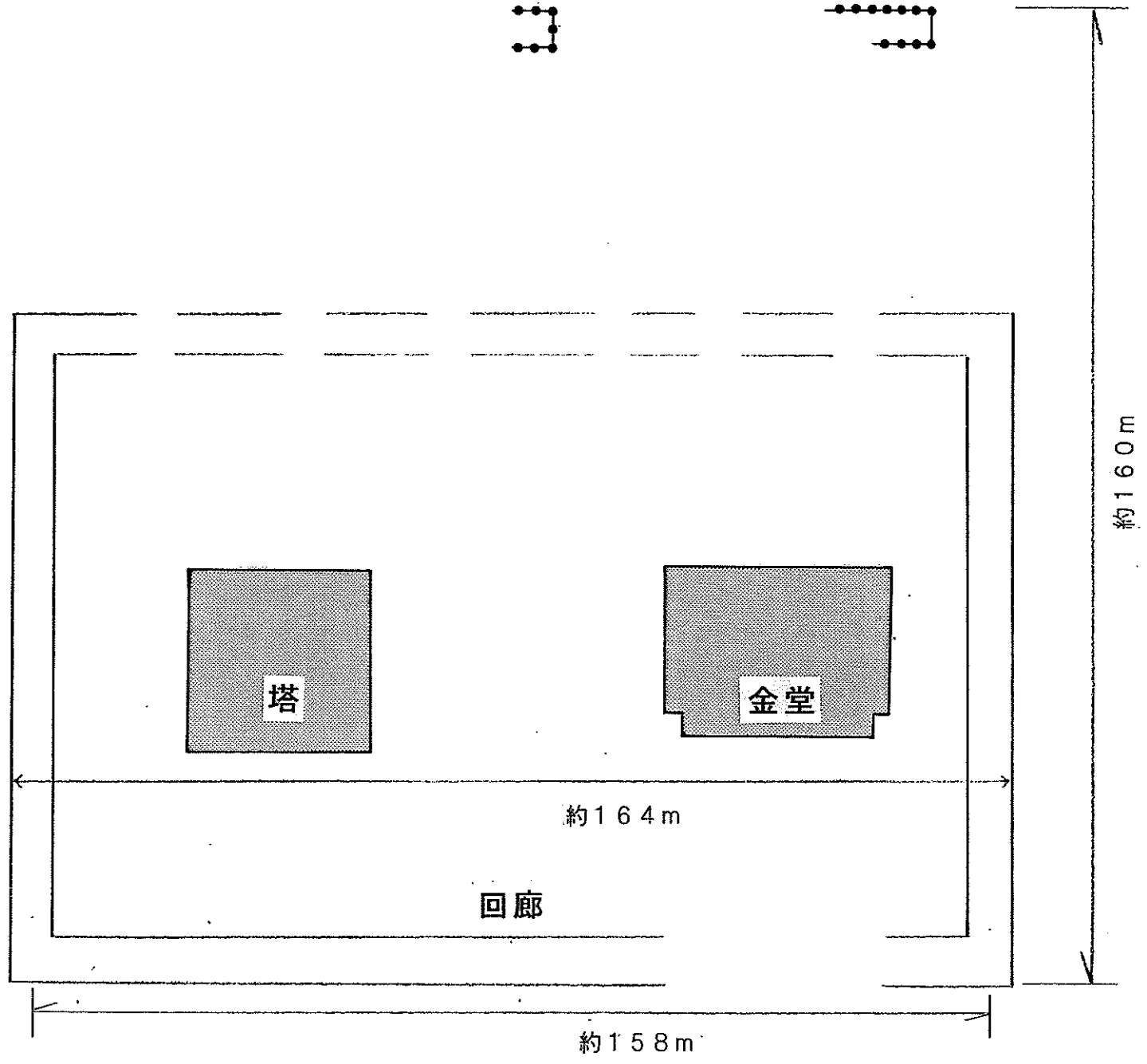


105次調査 遺構図





吉備池廃寺 金堂跡



吉備池廃寺 回廊の東西幅・僧房から南面回廊までの距離 (模式図)